令和元年　７月　５日

智頭町議会議長　谷口　雅人　様

同和問題調査特別委員長　　國本　誠一

委 員 派 遣 報 告 書

本委員会の調査事件について、下記のとおり委員を派遣したので、智頭町議会会議規則第７７条の規定により報告します。

記

１．期　　日
令和元年６月２６日（水）～２７日（金）　２日間

２．場　　所
２６日：香川県高松市玉藻町９－１０　「レクザムホール　大ホール」
２７日：香川県高松市サンポート２－１　「サンポートホール高松　大ホール」

３．内　　容
第４４回　部落解放・人権西日本夏期講座

４．目　　的
社会に存在する具体的な人権問題やその解決策についての理解を深め、今後の議会活動及び議員活動に資する。

５．派遣議員
委員３名
高橋達也議員、岩本富美男議員、大藤克紀議員

６．概　　要
（１）２６日
（ア）講演Ａ１「語り継ぐ　島の暮らしとハンセン病問題」
講師：森　和男 氏（大島青松園自治会長、全国ハンセン病療養所入所者協議会長）
（イ）講演Ａ２「部落差別の解消をすすめる教育」
講師：森　実 氏（大阪教育大学教職教育研究センター教授）
（２）２７日
（ア）講演Ｂ３「シングルマザーの不安と孤立の解消をめざして」
講師：赤石　千衣子 氏（ＮＰＯ法人しんぐるまざーずフォーラム理事長）
（イ）講演Ｂ４「障害者のリアル×東大生のリアル」
講師：野澤　和弘 氏（毎日新聞論説委員、「障害者のリアルに迫る」東大ゼミ担当教員）

７．特に参考になった事項、所感等

（１）講演Ａ１

療養所に共通する現状として、①入所者の高齢化と減少、②医師不足の恒常化があること、課題として、療養所の将来構想と施設の永続化（入所者がいなくなっても人権研修施設として活用）があり、大島清松園としての課題は、完全離島施設のため港の整備が必要とのことであった。

また、講座への参加後、ハンセン病家族への差別問題に対する判決が出されたが、今なお社会に広く存在している差別等、問題は多く残されている。さらなる取組が必要であると感じた。

（２）講演Ａ２

「寝た子を起こすな論」を実現しようと徹底チェックする場合、なぜそうしなければいけないのか十分な説明を行って徹底を図ることが必要となるが、そのためには部落差別の問題を説明しなければならず、結局意味のない論である、との独特な説明に新たに気づかされた。

（３）講演Ｂ３

会員数は現在２，１００人。ひとり親も立派な家族であることを当事者に伝えている。日本の家族は変化しており、夫婦と子の家族は２６％、単独（独身）３５％、夫婦のみ２１％、ひとり親と子は９％。

ひとり親貧困解決の短期目標として、自治体のやる気スイッチを入れることを力説され、①こども食堂と学習支援だけではないこと、②当事者の窓口対応嫌いをなくすこと（不快に感じる質問に気づくこと）、③クレームも学びにして当事者に「教えてくれてありがとう」という姿勢で接することなど、ひとり親に関する現状と課題を学んだ。

（４）講演Ｂ４

講師自身の子が重度身障者ということで、社内で障害者虐待などに取り組まれている。５年前から東大生が自ら始めた「障害者のリアルに迫るゼミ」を担当され、様々な障害者を講師に招いて学生たちとディスカッションされている。事件の背景にあって報道されない知的障害者の実態や、警察官が障害者をサポートするための要請活動の経緯や、応対した警察官僚の家族（障害者）に対する実話など、正にリアルな話を拝聴した。

「障害者を差別してはいけない。」「障害のある人には優しくしよう。」と教えられてきたことが、逆に、障害のある人を「障害者」という括りでしか見られなくしているということや、生まれつき障害のある人も、あるときから障害者となった人も、誰もが「障害者である前に一人の人間」である、ということを講師が強く話されていたことに胸を打たれた。

８．総括意見

議員として、差別をなくしていく行動に一層傾注することの大切さを改めて自問自答した機会であった。